



1) 一日目第三場 ドニャ・プルエーズ（剣幸）とドン・バルタザール（小田豊）
写真：橋本正樹
(C) 京都芸術大学舞台芸術研究センター（2016）



2) 三日目第八場 ドニャ・プルエーズと守護天使（瑞木健太郎）
写真：清水俊洋
(C) 京都芸術大学舞台芸術研究センター（2016）

演劇企画「ある」ジャリ原作、 堀益和枝構成・台本・演出「ユビュ王」

2016年10月13日～18日 於：ART THEATER かもめ座（阿佐ヶ谷）

齋藤公一

冒頭の科白「merdeを下敷きにし、さらにrを入れて下品にした merdre というジャリの造語」であるが、竹内健氏は「くそつたれ」と訳し、窪田般彌氏は「うんこたれ」と訳した。ジャリが目論んだ衝撃は明らかに後者の日本語の方が伝わ

てくると思う。この舞台は冒頭でユビュ王に相当する役柄の人物が「うんこたれ」とは言うが、ズボンのようなボロ切れをあげながら、さも自分が「うんこたれ」であるような説明的な演技をしてしまった。「うんこたれ」はジャリの意図では観

客に向けられてこそその威力を発揮するはずのもので、この冒頭の演技でこの芝居の方向が見えたような感じがしてしまった。また芝居が始まる5分ほど前に演出家が舞台脇に来て、「これから始まる芝居はブッフォンという、ヨーロッパ中世に見られた風刺の強い演技形態を用いて上演する。通常の芝居と異なるので戸惑うなかれ」と言った趣旨の話をした後、お手玉のようなものを前列の観客に渡し、舞台上でこれと同じものがユビュに向かって投げられたら皆さんも投げてください、と指示をして、あたかも観客参加を促すようなことを言って期待をさせた。ところが芝居が進行していくと観客が芝居に関わるのはユビュの王位篡奪が失敗に終わって民衆の支持が得られなくなったときに例のお手玉のようなものを投げるだけで、これに何の意味があるのかわからなかった。別に観客に投げさせなくてもいい場面であった。

ブッフォンとは言っても全体にそれなりにきちんと芝居になっていて、あえてブッフォンを使っているなどと説明しなくても不都合はなかったように思われる。ユビュの狡猾で薄汚い王位篡奪をユビュおっ母が後押しして、むしろユビュおっ母の方が陰謀家で策士であることが明らかになる、ある意味ではユビュおっ母に焦点が当たってしまった芝居になってはいるが、それはそれで面白かった。ユビュおっ母役を平田三奈子氏はエキセントリックに好演していた。またユビュ役の古川真司氏もとぼけた小心者の味わいをうまく出して好感が持てた。演出家が開演前に「これはブッフォンを使った諷刺劇だ」と断ってはいたが、ほんの一部で現首相の口癖を揶揄するような場面が

あったくらいで諷刺劇とは思えず、お手玉といい、遠慮がちな諷刺のような科白といい今ひとつ腰が引けている印象は拭えなかった。パンフレットにもブッフォンのことを観客は知らないだろうという思い込みでわざわざ説明して、ブッフォン色の濃くなるのに尻込みをしているように思えたりもした。シュルレアリスト達が高く評価する芝居であることがよくわかる演出ではあったが、行儀の良い演劇に慣れている観客を挑発することができたか、あるいはただ唾然とさせたにすぎないか評価の分かれるところである。なぜ今、わざわざ、ジャリを取り上げるのか、はっきりしない芝居であった。筋を丁寧になぞりいわゆる物語を辿っていくことができたが、ジャリはそうしたことを目論んでいたわけではなかったはずである。力量のある俳優陣を使っていることがあだになっているのか、あるいは演出家が観客への過剰な配慮をしたせいなのか、いまひとつ行儀の良い「ユビュ王」になってしまっている。結末も「日の本の国に帰る」というセリフをユビュに吐かせて、「どこでもない場所」と言うジャリの思惑を台無しにしているのも残念に思えた。ジャリ原作で構成台本を演出家が担当しているが、ユビュを「ゆびゅと」としたりバンセラスを「晩成螺王(ばんせいらおう)」などしたりしているのに何の意味があるのかは不明であった。芝居全体は悪くなく、それなりに楽しめた舞台であったが、演出を担当した堀益和枝氏の立ち回り過ぎの感が強い公演であった。ブッフォンや原作の構成に拘りすぎず、大胆な諷刺で暴れればもっと楽しめる舞台になったと思う。

青年団国際演劇交流プロジェクト 2016 『MONTAGNE / 山』

片山幹生

『MONTAGNE / 山』は、フランス人劇作兼演出家、フランス人俳優、日本人俳優、そして日本人通訳というミニマルなメンバーで制作された舞台

作品である。この小規模な舞台には、異文化間交流にかかわる様々な問いが興味深いかたちで集約されていた。